旧静和館の定礎に伴う埋納物
――新約全書と菊文の瓦と――

鈴木重治

一九九一年六月十三日から十月三十一日までの期間、旧静和館地点の発掘調査がおこなわれた。この発掘調査によって出土した遺構・遺物の大半は、公家屋敷である旧二条家にかかわる資料であった。調査の成果は、同志社埋蔵文化財委員会によって、近々発掘調査報告書として刊行される予定である。

この発掘調査に先立つ旧静和館の解体に伴う作業中、明治四十四年に新島襄夫人の八重によってとり行なわれた地鎮式後の定礎式に関係する資料が発見された。その中に、キリスト教の聖書が含まれていたことで注目された。一九九一年六月三日のことであった。

明治時代の定礎式の中でも、キリスト教に関係する極めて稀れな事例とのことで、物質文化史の側からも考古学上の近代資料として学術的な検討が要請されたことから、とりあえず、ここに事実関係を中心に記して置く。

旧静和館の建築史上の評価については、すでに専門家によって指摘されているが、発掘調査中に確認されたように、その基礎の残存部は極めて堅固であった。従来、同志社関係の建造物の解体時に観察された多くの基礎と比較しても、トップレベルの堅固さという。このような堅固な基礎の上部で、西南隅にあった定礎石の周辺部の解体中、レンガ積みの壁体の中から、埋納された状態で一個の鉛製の箱（横二〇・二糎、縦一二・一糎、高さ四十五・三糎）が作業員によって発見された。取り出されたこの箱は、明治四十四年十一月二十九日に、同志社創立三十六周年を記念して行なわれた旧静和館の定礎式の際に、丁寧に埋納されたものである。このことは箱の中に入っていた新約全書を含めた一括資料と、左記の記録がおおむね合致することで疑う余地がない。

つまり、同志社女學校同窓会が明治四十四年十二月二十五日発兌の「ᴥ女學校期報」第三十一號記載の静和館建築記事の全文は次の通りである。

豫て米國太平洋沿岸婦人會の寄贈に係る建築費四萬圓の女學校中央校堂は去る八月一日を以て新島未亡人によりて地鎮式を行ひ、九月二日起工、同十二日基礎工事に着手、十一月二十九日定礎式を擧行せり。

定礎式の順序は、男學校に於て開ける同志社創立第三十六回記念式後一同女學校内現場に參集し、讃美歌第百三十一番を以て開會、中瀬古教頭の聖書朗読（哥林多前書第三章九―十七）、平安教会牧師西尾幸太郎氏の祈禱、原田社長の本館建築始末書朗讀、ラル子ド博士の定礎禮、讃美歌四百六十二番、祝禱を以

て終れり。當日礎石中に納めたる始末書及目録は左の如し。

⊙静和館建築の始末

本館は北米合衆國太平洋婦人傳道會社ヨリ我同志社ニ寄贈セラレタルモノニシテ實ニ太平洋沿岸並ニ近接諸州ニ在ル多数婦人ノ義侠ナル同情ニ成レルモノナリ故ニ其厚意ヲ記念センガ為メパシフィク（pacific）ノ字ニ因ミ之ヲ静和館ト命名ス

今茲ニ本月本日本社創立第三十六回記念日ヲトシ定礎式ヲ擧行シ神學博士ラル子ツド氏(Rev. D. W. Learned, D. D.) 礎石ヲ設置ス

明治四十四年十一月二十九日

同志社々長兼女學校々長　原田助誌

建築委員

文學博士　松本亦太郎
ドクトル　佐伯理一郎
同志社女學校教頭　中瀬古六郎
同　上　教師　エム・エス・デントン
同志社　書記　安藤乙三郎
顧問技師　武田　五一
工事掛　大塚　精一
工事監督　北村　春吉
建築請負　清水滿之助
基礎工事請負碇組　澁谷徳三郎

目録　（建築礎石中に納めたる書類）

一、建築工事之由來　一通
一、新約全書　一冊
一、同志社女學校期報　一部
一、同志社女學校規則　一部
一、同志社財團寄附行為證及規則書　一部
一、同志社校友會便覧　一冊
一、同志社時報　二部
一、同志社職員姓名録　一部
一、同志社繪葉書　数種
一、同志社英語規則　一部
一、新島先生小傳（英語）　一部
一、建築圖面
一、建築豫算概要　一枚
一、工事施行表　一枚
一、同志社明治四十三年報告一部

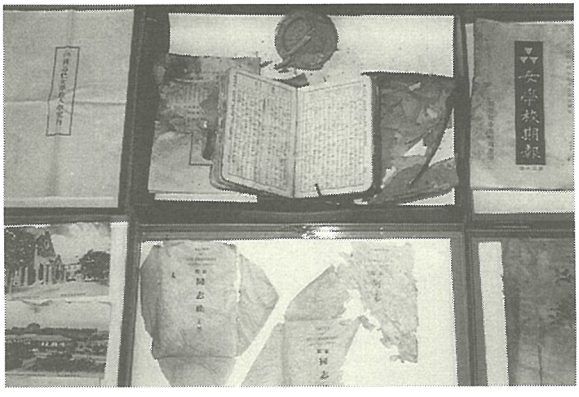
右之通

以上が記録の全文である。

タイムカプセルよろしく、鉛の箱に収納されて埋納されていたこれらの資料は、旧静和館の解体によって八十年ぶりに太陽の光を見たことになる。しかし実体は、当時の目録に記載されていながら無いもの、記録がないにもかかわらず鉛の箱の中に納められていたものなどがある。つまり、発見された当時女子中・高等学校の事務長であった増田亮次氏によると、定礎式時点での目録中の「建築図面」は無かったが、それに替って英文の米国太平洋婦人会の寄贈の経緯を記した書類が、目録中に書かれていないにもかかわらず封入されていたとのことであった。なお、目録にない資料で加えられていたものに、面戸瓦として二条家で使われていた可能性の強い菊文の小型軒丸瓦が、一点含まれていることは注目し

松山総長らによる埋納物の確認、1991. 6 . 3

てよい。その後の発掘調査によって多量に出土した公家屋敷に伴う江戸時代の小型軒丸瓦と全く同一の種類である。瓦が封入されていたことの意味は不明であるが、当時の史料と共に新約全書が入っていたことについては、その理由は明白である。地鎮式を新島八重がとりおこなったこと、定礎式に聖書朗読がお



埋納物中の新約全書と菊文の小型軒丸瓦；上段中央

こなわれ讃美歌が歌われたことなどからも、同志社らしいキリスト教による祈りが込められていることの確かな証しであることは間違いない。むしろ新約全書が納められていたことは、同志社として当然のことであったに違いない。これに対して菊文の小型軒丸瓦が同封されていた理由については、謎というしかない。類例をまって検討する必要があろうが、近代のレンガ積み建造物に関して多量の資料を収集されている国立科学博物館の清水慶一氏によると、キリスト教的地鎮式という点だけでも、旧静和館の建築史上の特異性が指摘されるという。

この特異な点は、一九九三年一月に開かれた第六回江戸遺跡研究会の大会でもとりあげられた。この研究会のテーマは『遺跡にみる幕末から明治』であり、清水慶一氏による「初期洋風建築物の遺跡について」、東京大学の堀内秀樹氏による「江戸時代末から明治時代初期の遺物群」などの研究発表があった。質議応答中の各地の報告の中でも、明治時代のレンガ積み建築物に伴う聖書の検出例は、旧静和館の例を除いてこれまで日本には知られていないとのことであった。このことは、考古学の研究領域が拡大していく中での近代資料としても、重要な意味をもつ。

旧静和館は、本誌の別項にもあるように新静和館の落成によって再生したかに見える。この新静和館の定礎に伴って何が納められているかは知らない。『佛作って魂入れず』と云われないように、静和館が生き生きと蘇る為には、さまざまな分野での新しい教育・研究活動に旧静和館への想いも含めて生かされることが、とりわけ重要に思える。すでにその教育活動は始っている。

旧静和館の定礎に伴う埋納物中に、新約全書と江戸時代の古い瓦が共に封入されていたことは、十分に説明することはできないが、当時の同志社々長原田助らによって新たな創造と、古い伝統のバランスのとれた合作への大きな期待が込められていたからではなかろうか。歴史的な変画期を迎えていればこそ、かつて米国太平洋沿岸婦人会が果たしたような、グローバルな視野での行動が求められている。

常に、歴史からは学ぶところが大きい。さらに創造的発展への期待も大きい。

（同志社大学校地学術調査委員会調査主任）